自己点検・評価報告書２０１６・２０１７全学報告会における外部講評

【工学部に関する講評内容】
講評者：明治大学　名誉教授　伊藤　光　氏

◆内部質保証について、全学で着実に行っており評価できる。（第 2 章）

◆授業評価アンケートと卒業生のアンケートの実施、各委員会で結果の評価・検証を行っている点は評価できる。アンケートは、学生の声を直接聞くことができる機会であるので、教員は真摯に受け止め改善に取り組んでほしい。（第 7 章）

◆就職、キャリア教育は教員が学生に、大学卒業後の進路を考える意識をどれだけ持たせるかの指導が重要である。特に大学院への進学率を増やす工夫は理解できるが、大学 4 年生が「もう少し研究したい」と思ってもらえるよう各研究室の卒業研究の指導に力を入れてほしい。（第 7 章）

◆実験・実習時の事故を想定した「安全の手引き」の作成を提案する。また、昨今多くある天災時に備えて学生をどう誘導するか等、より具体的な対応策を検討することが望ましい。（第 8 章）

【芸術学部に関する講評内容】
講評者：金沢美術工芸大学美術工芸学部工芸科　教授　田中　信行　氏

◆芸術学研究科は、領域としてではなくメディアアート一専攻と位置付けており、現代求められている体制をとっている点を評価できる。今後、研究科がより高度な研究を行い、作家や研究者を輩出することに期待したい。（第 1 章、第 3 章）

◆増加している留学生への語学支援は必要である。日本語能力の受入れ基準や、入学後の語学支援の体制を確立し、質を保つことが大学の質を保つことに繋がる。（第 7 章）

◆芸術学部一元化後、各キャンパスの敷地面積の差が大きすぎる。学部間で学生に不公平が生じることのないよう、中野キャンパスに移る芸術学部の学生には十分な環境（教員・施設）を提供できるよう検討するべきである。（第 8 章）

◆大学では自己点検・評価が求められているが、実際には現場は手一杯であり力を入れて取組むことが難しい。昨今重視されている内部質保証も含め、東京工芸大学は非常にまじめに取り組んでいるという印象を受けた。

以上